

未完成の学籍簿と卒業論文目録

—— 台北高等商業学校の場合 ——

渡 辺 邦 博

目次

1. 問題の所在
2. 作業手順または方法
3. 卒業者名簿の確認
4. むすび

1. 問題の所在

以下に試みるのは、別の機会に棚上げしておいた、台北高等商業学校の学籍簿と、卒業論文目録に関わる謎の解明である。

かつて台北高等商業学校の卒業論文を取り扱った際に、総数で1458点に上る卒業論文の中に存在する著者名が、公式・非公式に記録されている卒業者名簿にあるものと必ずしも一致しない点が発見されたが、その折、筆者は暫定措置として、卒業論文が作成されたのは事実であるから、その事実を前提として、この高商の教育研究活動を考察したのであった。今回改めて、卒業名簿を可能な限り復元し、卒業論文目録との整合性を確認する作業を試みる。

2. 作業手順または方法

以下では、台北高等商業学校の『台北高等商業学校一覧』（以下『学校一覧』または、『一覧』と略称する場合がある）、または『台湾総督府高等商業学校一覧』を材料にして、卒業名簿と卒業論文との関係を、入学から卒業ま

キーワード：台北高等商業学校、卒業論文、商業教育、社会科学の制度化、卒業名簿

でを時系列に従って、可能な限り明らかにする作業を行う。同校は、1919（大正8）年に設置された際には台湾総督府高等商業学校と称されたが、1926（大正15）年、台南に設置された台南高等商業学校の登場によって、台北高等商業学校と改称し、昭和5年の台南高商の廃校まで、同校の在学学生を台南分教場で教育する役割を担った¹⁾。その際、当該学校内で、おそらく入学時に作成されたと推測される『卒業者名録』を補助材料として利用する。同校の『学校一覧』は、昭和16年に出されたものが、現在のところ最新であり、それ以降は作成されていないとして、作業を行う。

昭和16年までの『学校一覧』には、毎年、入学者名簿と、2学年から3学年までの在校者名簿が掲載され、それに開校以来の卒業者名簿も付加されている。昭和16年の『一覧』以降の資料が欠如しているため、別の機会に行った卒業論文の検討にも問題が残った。今回の検討では、昭和16年の入学生を時間の経過に従って追跡し、昭和16年入学生はその年以降に実施された修業年限短縮によって、昭和18年9月に卒業、その次の昭和17年に入学した学生は昭和19年9月にといた風に卒業が繰り返されているので、終戦によって通常の学校が停止される昭和20年までの学生の動向を確認する。

昭和17年の『学校一覧』は作成されていないが、昭和17年以降の新入生の動向は別として、在学学生についてはある程度実態の追跡が可能である。貿易専修科、第二部支那科、東亜経済専修科についても同様である。

この『一覧』のデータを補足するのが、『名録』である。また、『名録』には入学時のデータ、出身校や本籍地、軍隊への入営の事実なども記述されており、より立ち入った検討の材料にも使用できるものであるが、公開を前提としたものでは必ずしもないので利用には慎重を期したい。

作業を行っての困難は、最終学年度昭和20年について最も大きなものがあつた。戦争と言う社会制度の根幹にかかわる事態の進行、その終結に伴う制度転換が問題の解明の前に立ちふさがり、ある程度以上には進めない状態となつた。

昭和 20 年卒業生のデータ，とりわけ学事に関わるデータが不足・欠落しているからである。以下の検討では，昭和 20 年卒業者 102 名について集中的に作業を進める。その結果 102 名中昭和 19 年に関わる学生についてはある程度事情を知ることができるが，昭和 20 年度の学生については，行き止まりに突き当たった感がある。

以下に節を改めて考察を加えたい。

3. 卒業者名簿の確認

いく度か触れたことであるが，旧台北高商（現台湾大学社会科学学院に統合）の終戦直前の卒業生名簿は，昭和 16 年の『台北高等商業学校一覧』を最後に，公刊が中断されたまま，廃校の事態をむかえた。

昭和 16 年までは，その時点での開校以来の卒業生名簿と，その時点での在校生名簿も掲載されており，これまであまり詮索されることがなかった。

筆者は，ふとしたきっかけでこの問題に遭遇することになったが，それは卒業論文の諸相を明らかにするだけでなく，未完成の学籍簿に関する問題にも若干の示唆を与える。

作業は，「昭和二十年卒業者名録」との題を持った，102 名の学生名簿を中心に行う。

昭和 16 年までは，本科入学生，第二年次生，第三年次生，貿易専修科入学生，昭和 15 年からは第二部支那科，昭和 16 年からは東亜経済専修科入学生の名簿があるので，本科に入学した年度から各在学年度を追跡すれば，本科の学年進行に従い卒業までの経過がフォローできるから，本科学生の実態がある程度明らかになろう。必要があれば，貿易専修科，第二部支那科，東亜経済専修科の学生の実態もチェック可能である。

今回は棚上げするが，昭和 16 年以前についても，ほぼ各年に出された『学校一覧』によって，卒業生の実態も追跡できるはずである。

主として問題となるのは，昭和 17 年，昭和 18 年，昭和 19 年，昭和 20 年の学籍であろう。

以下では、『卒業生名録』における昭和20年部分に記載されている、102名の卒業予定者に裏付けがあるかどうかを検討する。

昭和20年の『名録』における102名は、15のグループに分類されているから、それを手掛かりにする。グループ分けは、十一回3名、十二回9名、十三回7名、十四回5名、十五回6名、十六回4名、十七回4名、十八回5名、十九回4名、二十回2名、二十一回4名、二十二回10名、二十三回9名、二十四回7名、二十五回23名と1から102までの番号が付加された個人名からなっている。このリストは、その前年までと同じ様式用の紙に、ただし、前年までとは異なり、手書きで作成されている。昭和19年までは、甲とか乙とかのクラス毎にアイウエオ順に配列された名列表が印刷され、卒業時にこのクラス名列表が卒業名簿作成に使用されたと推定するが、昭和20年『名録』だけが手書きである。

このグループ分けは、『学校一覧』を検討すれば、卒業年度を意味する。つまり十一回は昭和6年『学校一覧』の第十一回卒業年度を意味する²⁾。以下十二回は昭和7年度の卒業年度をと、この学校の卒業年度を意味するのが確認され、昭和6年から昭和16年までの『一覧』を毎年チェックすれば、当該の学生が確認できるのではないかとと思われるので、昭和6年以降昭和16年までについて、順次チェックを行い、確認の作業を行なう。

まず、第十一回（つまり昭和6年『学校一覧』に記載されている卒業生リストとみなす。以下同様）とグループ分けされている3名<1 陳垣鉅, 2 陳瑞謙, 3 徐関樹³⁾>について、

この3名は、『名録』では実名が使用されているが、諸般の事情を考慮して昭和20年9月と12月の卒業生として記述されているものを、作成者の意図に従って振られた102名の通し番号の第1番から第3番までの学生生徒を意味する。『学校一覧昭和4年』によると、昭和4年台北高等商業学校に入学し、第1学年の甲組・乙組に在籍した81名のうちの3名であり、『一覧昭和5年』では総数72名となった第2学年に在籍、『一覧昭和6年』では総数69名となった第3学年に在籍、昭和7年春の卒業時点では『一覧昭和7年』

の卒業生 65 名の中に記載されている。したがって、この 3 名が昭和 20 年に卒業したとするのは、二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十二回（昭和 7 年卒業生）とグループ分けされている 9 名＜4 陳進祥, 5 劉啓明, 6 林壽南, 7 何焜煌, 8 胡自瓶, 9 吳喜, 10 高湯盤, 11 黃謀義, 12 周菩披＞について、

この 9 名、上記と同様に通し番号の第 4 番から第 12 番までの生徒は、昭和 5 年『学校一覧』では昭和 5 年にこの学校に入学し、第 1 学年の甲組・乙組に在籍した 80 名のうちの 9 名であり、『一覧昭和 6 年』では総数 73 名となった第 2 学年に在籍、『一覧昭和 7 年』では 68 名となった第 3 学年に在籍、昭和 8 年の卒業時点では『一覧昭和 8 年』の卒業生 66 名の中に記載されている。したがって、9 名全員が昭和 5 年入学、昭和 6 年、昭和 7 年、昭和 8 年まで在学卒業の記載があるのだから、この 9 名が昭和 20 年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十三回（昭和 8 年卒業生）とグループ分けされている 7 名＜13 陳志奎, 14 郭傳圓, 15 黃萬章, 16 吳天保, 17 洪榮紳, 18 謝孟章, 19 劉盛東＞について、

この 7 名、上記と同様に通し番号の第 13 番から第 19 番までの生徒は、昭和 6 年『学校一覧』では昭和 6 年にこの学校に入学し、第 1 学年の甲組・乙組に在籍した 76 名のうちの 7 名であり、『一覧昭和 7 年』では総数 73 名となった第 2 学年に在籍、『一覧昭和 8 年』では 68 名となった第 3 学年に在籍、昭和 9 年の卒業時点では『一覧昭和 9 年』の卒業生 66 名の中に記載されている。したがって、7 名全員が昭和 6 年入学、昭和 7 年、昭和 8 年、昭和 9 年まで在学卒業の記載があるのだから、この 7 名を昭和 20 年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十四回（昭和 9 年卒業生）とグループ分けされている 5 名＜20 張順藤, 21 陳亭郷, 22 劉啓盛, 23 莊炎塗, 24 吳金獅＞について、

この 5 名、上記と同様に第 20 番から第 24 番までの生徒は、昭和 7 年『学校一覧』では昭和 7 年にこの学校に入学し、第 1 学年の甲組・乙組に在籍し

た83名のうちの5名であり、『一覧昭和8年』では総数77名となった第2学年に在籍、『一覧昭和9年』では77名となった第3学年に在籍、昭和10年の卒業時点では『一覧昭和10年』の卒業生77名の中に記載されている。したがって、5名全員が昭和7年入学、昭和8年、昭和9年、昭和10年まで在学卒業の記載があるのだから、この5名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十五回（昭和10年卒業生）とグループ分けされている6名＜25 陳長興、26 楊以彰、27 供坤華、28 黃貞以、29 絲維英、30 林榮聰＞について、

この6名、上記と同様に第25番から第30番までの生徒は、昭和8年『学校一覧』では昭和8年にこの学校に入学し、第1学年の甲組・乙組に在籍した85名のうちの6名であり、『一覧昭和9年』では総数79名となった第2学年に在籍、『一覧昭和10年』では77名となった第3学年に在籍、昭和10年の卒業時点では『一覧昭和11年』の卒業生76名の中に記載されている。したがって、6名全員が昭和8年入学、昭和9年、昭和10年、昭和11年まで在学卒業の記載があるのだから、この6名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十六回（昭和11年卒業生）とグループ分けされている4名＜31 童傳盛、32 王榮棠、33 王錦全、34 陳□郷＞について、

この4名、上記と同様に第31番から第34番までの生徒は、昭和9年『学校一覧』では昭和9年にこの学校に入学し、第1学年の甲組・乙組に在籍した85名のうちの4名であり、『一覧昭和10年』では総数78名となった第2学年に在籍、『一覧昭和11年』では69名となった第3学年に在籍、昭和12年の卒業時点では『一覧昭和12年』の卒業生66名の中に記載されている。したがって、4名全員が昭和9年入学、昭和10年、昭和11年、昭和12年まで在学卒業の記載があるのだから、この4名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第十七回（昭和12年卒業生）とグループ分けされている4名＜35

邱雲鳴, 36 陸雲漢, 37 上林秀雄 (林瑞庚)⁴⁾, 38 楊錦鐘>について,

この4名, 上記と同様に第35番から第38番までの生徒は, 昭和10年『学校一覧』では昭和10年にこの学校に入学し, 第1学年の甲組・乙組に在籍した79名のうちの4名であり, 『一覧昭和11年』では総数80名となった第2学年に在籍, 『一覧昭和12年』では75名となった第3学年に在籍, 昭和13年の卒業時点では『一覧昭和13年』の卒業生75名の中に記載されている。したがって, 4名全員が昭和10年入学, 昭和11年, 昭和12年, 昭和13年まで在学卒業の記載があるのだから, この4名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に, 第十八回 (昭和13年卒業生) とグループ分けされている5名<39 顔鄭潜, 40 頼耀奎, 41 蔡 福, 42 莊村榮一⁵⁾, 43 張瑞炎>について,

この5名, 上記と同様に第39番から第43番までの生徒は, 昭和11年『学校一覧』では昭和11年にこの学校に入学し, 第1学年の甲組・乙組に在籍した82名のうちの5名であり, 『一覧昭和12年』では総数76名となった第2学年に在籍, 『一覧昭和13年』では69名となった第3学年に在籍, 昭和14年の卒業時点では『一覧昭和14年』の卒業生65名の中に記載されている。したがって, 5名全員が昭和11年入学, 昭和12年, 昭和13年, 昭和14年まで在学卒業の記載があるのだから, この5名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に, 第十九回 (昭和14年卒業生) とグループ分けされている4名<44 顔朝椿⁶⁾, 45 連清海, 46 陳進旺, 47 楊瑞慶>について,

この4名, 上記と同様に第44番から第47番までの生徒は, 昭和12年『学校一覧』では昭和12年にこの学校に入学し, 第1学年の甲組・乙組に在籍した80名のうちの4名であり, 『一覧昭和13年』では総数73名となった第2学年に在籍, 『一覧昭和14年』では68名となった第3学年に在籍, 昭和8年の卒業時点では『一覧昭和15年』の卒業生66名の中に記載されている。したがって, 4名全員が昭和12年入学, 昭和13年, 昭和14年, 昭和15年まで在学卒業の記載があるのだから, この4名が昭和20年卒業とする

のは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第二十回（昭和15年卒業生）とグループ分けされている2名<48 魏世標, 49 施文禧>について、

この2名、上記と同様に第48番から第49番までの生徒は、昭和13年『学校一覽』では昭和13年にこの学校に入学し、第1学年の乙組に在籍した76名のうちの2名であり、『一覽昭和14年』では総数75名となった第2学年乙組に在籍、『一覽昭和15年』では76名となった第3学年乙組に在籍、昭和16年の卒業時点では『一覽昭和16年』の第20回卒業生74名の中に記載されている。したがって、2名が昭和13年入学、昭和14年、昭和15年、昭和16年まで在学卒業の記載があるのだから、この2名が昭和20年卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

次に、第二十一回（昭和16年）⁷⁾とグループ分けされている4名<50 鄭樹林, 51 翁沛銓, 52 林定坤, 53 楊文丙>について、

この4名、上記と同様に第50番から第53番までの生徒は、昭和14年『学校一覽』では昭和14年にこの学校に入学し、第1学年の甲組・乙組に在籍した84名のうちの4名であり、『一覽昭和15年』では総数78名となった第2学年に在籍、『一覽昭和16年』（昭和16年10月31日発行）では75名となった第3学年に在籍、昭和16年の卒業時点では『一覽』に卒業生として同数が記載されるべきであった。しかし、『一覽昭和16年』の卒業のための公刊物は上記以外に出されていない。現在のところ推測ではあるが、この4名が卒業したとみなす。少なくとも、4名全員が昭和14年入学、昭和15年、昭和16年まで在学卒業の記載があるのであるから、また別に検討するような事実⁸⁾により、この卒業予定者4名を、昭和20年の卒業とするのは二重卒業となるのではなかろうか。

以上の学年までは、曲がりなりにも学籍を追跡する公式ないしは正規の名簿が存在したのであるが、以下の生徒学生の場合には公式ないしは正規の卒業名簿が存在しないので、事情が異なる⁹⁾。

では、第二十二回（卒業式が行われているとすると昭和17年となる）¹⁰⁾と

グループ分けされている 10 名<54 梁榮, 55 林水泉, 56 上田哲士, 57 陳江流, 58 林彦治, 59 余清標, 60 郭□徳, 61 汪 樹, 62 與謝野英彦, 63 周文福>について,

この 10 名, 上記と同様に第 54 番から第 63 番までの生徒は, 個別的な詮索が必要となる。

54 は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年甲組の梁榮太郎と同一人物とすれば, 同じく『一覽昭和 16 年』の第 2 学年甲組に在籍が確認できる。また, 卒業論文 1241「標準原価に対する一考察」の著者の可能性も否定できない。

55 は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年乙組に在籍, 『一覽昭和 16 年』の乙組に在籍して, 卒業論文 1286「英国現代随筆選」の著者である可能性も否定できない。

56 は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年甲組に, 卓文丙なる生徒が在籍し, その翌年第 2 学年甲組に同人物が在籍しているのだが, 前述の『名録』の第 21 回卒業者名簿には, 卓文丙の横に「上田」と読める書き込みがある。それを参考にすると, この卓文丙が改名したとも判断できるのではないかと考えられる。

57 は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年甲組に在籍, 『一覽昭和 16 年』の甲組に在籍して, 卒業論文 1251「「ジャック・ロンドン—自叙—」及び「遠国に於いて」」の著者である可能性も否定できない。

58 は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年乙組に在籍, 『一覽昭和 16 年』の乙組に在籍している田中鵬介である可能性も否定できない。なぜなら, 『名録』の第 22 回卒業者名簿には, 田中鵬介の横に, 58 の書き込みがあるからである。そうだとすると卒業論文 1292「英国の植民政策—「インドに於ける統治策」—」の著者であるかも知れない。

59 余清標は、『一覽昭和 15 年』の第 1 学年乙組に在籍, 『一覽昭和 16 年』の乙組に在籍して, 卒業論文 1294「大東亜共栄圏の通貨金融政策を論ず」の著者である可能性もある。また, この生徒は, 会誌『鵬翼』の 27 号と 28 号に論文が掲載されている者である。

60 郭□徳は、『一覽昭和15年』の第二部（支那科）の第1学年に在籍、『一覽昭和16年』の第二部（支那科）第2学年に在籍している。これは仮説ではあるが¹¹⁾、支那科第2学年の後、第3学年に編入して、卒業となった経路も考えられる。現にこの学生名で卒業論文1302「中国現代政治思想史」が提出されている。

61 汪 樹は、『一覽昭和15年』の第二部（支那科）の第1学年に在籍、『一覽昭和16年』の第二部（支那科）第2学年に在籍している。郭同様に、本科に編入、卒業となったかも知れない。現にこの生徒学生名で卒業論文1316「中国農村経済問題解決の方策」が提出されている。

62 與謝野英彦は、『一覽昭和15年』の第二部（支那科）の第1学年に謝英智名の在籍者がおり、同じく『一覽昭和16年』の第二部（支那科）第2学年にも在籍している。この生徒が改名して、與謝野英彦となったと推量し、卒業論文1322「列強の南洋分割と華僑」を提出したと想定されないだろうか。

63 周文福は、『一覽昭和15年』の第二部（支那科）の第1学年に在籍、『一覽昭和16年』の第二部（支那科）第2学年に在籍している。この生徒も本科に編入し、卒業論文1323「朱子格言其の他」を提出したとは想定されないだろうか。

したがって、10名のうち、6名は昭和15年と昭和16年の学籍だけしか確認はできないが、また残りの4名も入学は第二部・支那科でさらに1年在学して、全員が卒業論文を提出していることを根拠に、昭和17年に卒業が認められたと推定する。だとすれば、昭和20年の卒業は、昭和17年の卒業の追認と見なせないこともない。

次に、第二十三回（行われているとすると昭和18年）とグループ分けされている9名<64李清楠、65頼青木、66陳石□、67黄登選、68林戀煌、69林惟明、70陳化育、71楊阿□、72陳再生>について、

64 李清楠は、『学校一覽昭和16年』に昭和16年に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文1385「大

東亜建設と南方華僑」を提出してはいるので、卒業までの学籍を認めても妥当かと思われる。

65 頼青木は、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1350「将来に於ける南方企業方策」を提出してはいるので、卒業までの学籍を認めても妥当かと思われる。

66 陳石□、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1361「戦争経済力と国民所得」を提出してはいるので、卒業までの学籍を認めても妥当かと思われる。

67 黄登選、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1435「広州労働家庭之研究」を提出してはいるので、本科に編入後卒業との学籍を認めても妥当かと思われる。

68 林戀煌、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年に第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1433「諺の研究」を提出してはいるので、本科に編入後卒業との学籍を認めても妥当かと思われる。

69 林惟明、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1363「経済学における理論と政策と歴史」を提出してはいるので、本科に編入後卒業との学籍を認めても妥当かと思われる。

70 陳化育、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論文 1445「中国普及教育問題」を提出してはいるので、本科に編入後卒業との学籍を認めても妥当かと思われる。

71 楊阿□、『学校一覧昭和 16 年』に昭和 16 年第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。しかし、卒業論

文1440「中国家庭改造問題」を提出してはいるので、本科に編入後卒業との学籍を認めても妥当かと思われる。

72 陳再生は、『学校一覧昭和16年』に昭和16年第二部・支那科に入学したことは確認できるが、その後の在籍を証明する資料がない。また、卒業論文を提出したとは認められないので、疑念が残るままである。

したがって、この9名中、8名は昭和20年時点で卒業が追認されたと考える方が妥当と思われる。

次に、第二十四回（行われているとすると昭和19年）¹²⁾とグループ分けされている7名について、

この7名、上記と同様に第73番から第79番までの生徒は、一層資料が少ない。存在するのは、いわゆる『名録』である。台湾大学総図書館に保存されているこの資料のうち、昭和17年の入学名簿と推定される79名の¹³⁾もの、その前後に綴じられている「第二部」と表記されている45名のものから推測する¹⁴⁾。

昭和17年の入学名簿とは言っても、活字で作成された26名+20名の部分と、通し番号自体が修正され、生徒学生名も手書きになっている14名+19名があり、それ以前の年とは異なる状況が推測されるが、その限りで推測を行う。

この本科学生名簿と推定されるものの中に、第二十四回グループ7名のメンバーが見出されるか？を検討すると、7名のうち2名が、74、75、が見出される。さらに、79もそう考えられるかもしれないが、そうすると3名が、本科の候補者である。

次に第二部・支那科の名簿と推定されるものの中に、このグループメンバーが見出されるか？この名簿も、活字で作成された21名分と、手書きの24名分に分かれるが、そのうち77、78の2名が支那科の候補者である。

さらに劉秀雄は、鈴木秀雄のことかも知れない。

しかしながら、名簿作成時に盛り込まれているとは言え、卒業に至る経路

はそれ以上に得られることはない。

これまで卒業に至る重要な資料として使用された、卒業論文作成の形跡がまったく途絶える。つまり、これまで資料として使用できた1458点の卒業論文は、昭和16年入学生までで、著者らしき生徒が途切れるのである。昭和17年入学生の実態がないと言う意味ではない。戦況の悪化・繰り上げ卒業などによって、卒業論文の作成が中断されたと考えた方が自然かも知れない。

最後に、第二十五回（行われているとすると昭和20年）¹⁵⁾とグループ分けされている23名について、

この23名、上記と同様に第80番から第102番までの生徒は、この『名録』以外の資料を現在のところ利用することができない。したがって、卒業生の名簿に組み込むのには、消極的にならざるを得ないのである。未完の「学籍簿」との限定的修飾語を付す所以である。

4. むすび

以上の作業を経て、2つのことが明らかとなった。

第一に、台北高等商業学校の卒業名簿は、昭和18年卒業までに関しては、昭和16年10月公刊の『学校一覧』に記された第1学年入学生名簿、さらに別途1990年代に作成された「卒業論文目録」を検討することにより、卒業の根拠があると言える。昭和18年9月に、その前の年同様に、半年の修業年限短縮措置によって、昭和16年4月入学生は、卒業となったのは確かであると考えてよいからである。

そのうち、昭和20年の『卒業生名録』に記載されている9名は、卒業の追認であるとみなせる。

昭和19年卒業については、正規の名簿は公刊されていないが、在学生の卒業に関する証言がある事実から卒業式は9月に行われたと推測される一方で、昭和20年の『卒業生名録』に記載された7名については、『名録』を裏

付ける証拠が必ずしも整わないので、グレーゾーンと判断せざるを得ない。今後、例えば卒業論文の現物が発見されるとのような事実があれば、修正する必要はあるだろうが。

第二に明らかとなったのは、1458点と称される卒業論文のほとんどの著者が、昭和18年までに卒業した生徒のものであることが、かなりの精度で確認されたことである。台湾のみならず、日本本土における高等教育機関の実態との比較が不可欠ではあるが、昭和19年以後には卒業論文作成を許すような戦況であったか否か、現在のところ判断を保留することにしたい。

作業の実際は、昭和20年台北高等商業学校『卒業生名録』から採録した102名の「卒業生」名についての検討ファイルを参照して頂きたい¹⁶⁾。

注

- 1) 別に掲載した、台北高等商業学校の『学校一覧』の所蔵状況を参照のこと
- 2) 何故昭和6年第10回以降か？については、様々な推測が可能である。例えば、台南分教場の卒業生がその前年昭和5年に卒業して、この昭和6年以降、新たな状況で卒業生を送り出すことになったから？との考えもある。
- 3) 以下、『名録』昭和20年版に振られた学生番号と個名を併記する。
- 4) 昭和13年『第17回卒業生名録』には、林瑞庚が上林秀雄と記載がある。
- 5) 昭和14年『第18回卒業生名録』には、莊（村）榮（錦榮）一と訂正されていた。
- 6) この4名中、顔朝椿は誤記で、顔朝椿は昭和11年入学で、昭和13年に第3学年在籍して、卒業は昭和15年の第19回卒業となっている。それを加味して昭和12年入学生はそれを除いて3名が正しい。
- 7) 修業年限短縮 まず1941年（昭和16年）10月、大学、専門学校などの修業年限を3ヶ月短縮することを定め同年の卒業生を対象に12月臨時徴兵検査を実施して、合格者を翌1942年（昭和17年）2月に入隊させた。1942年（昭和17年）には、さらに予科と高等学校も対象として修業年限を6ヶ月間短縮し、9月卒業、10月入隊の措置が取られた。つまりこの年には、正規の卒業式が、昭和16年3月と、繰り上げ卒業式が12月に行われたことになるが、本校の『学校一覧』

が正規の3月卒業までの事実しか含んでいないことになる。昭和16年『第21回卒業生名録』には、昭和16年12月27日卒業と表紙に記載がされている。

- 8) 卒業論文の検討により、4名とも卒業論文を提出している。
- 9) 昭和16年の『学校一覧』に存在する姓名については、以上まで個名と『卒業生名録』に振られた番号をも使用してきたが、以下では、個名も軽視しないが『名録』昭和20年に振られた番号に力点を置く。
- 10) 『卒業生名録』には、昭和17年9月23日卒業と記されている。
- 11) 学則の第四章、第14条には学年ごとの、入学資格が謳われている。その第十四条ノ三、第三学年ニハ前項<一旦退学したものに関する規定・筆者注>ノ場合ヲ除クノ生徒ノ入學ヲ許スコトヲ得ズ、とあるが。
- 12) 『卒業生名録』には昭和19年9月1日卒業と記されている。
- 13) すでに『一覧』はないが、この昭和17年には石橋政嗣が入学し、昭和19年に卒業したと、回顧録で氏家などの動静を語っているの、この年は卒業式が挙行された可能性が大きい。
- 14) 何故第二部の名簿と判断するかと言えば、昭和16年『学校一覧』の第二部支那科のメンバーが含まれる場合があるからである。
- 15) 「卒業生名録」には、昭和20年9月25日卒業、同12月18日卒業と記されている。
- 16) 通し番号1から1332番までの卒業論文の著者と、学籍簿との照合結果も掲載すべきであるが、ここでは、卒業論文番号1333以下の作業だけを、以下に表にして提示する。この目録は2012年に台湾奨助金による調査により閲覧できた。

卒業論文 通し番号	卒業論文タイトル	備考
1333	砂糖配給統制二就テ (『鵬翼』第25号に論文掲載)	何故この通し番号が振られたのか不明だが、昭和16年卒業の上野幸男の卒業論文である。
1334	印度社会に於ける農村及び宗教と大東亞 共栄圏の一環としての印度	昭和16年入学1年乙組だった、白石幸雄の卒業論文
1335	富ト価値ト資本	昭和16年入学1年甲組永田賢蔵の卒業論文
1336	産業経済学の要素	昭和16年入学1年甲組川崎長夫の卒業論文
1337	太平洋の周囲	昭和16年入学1年甲組木田忠廣の卒業論文
1338	戦時下台湾に於ける自動車に就いて	昭和16年支那科入学酒井常治の卒業論文

1339	友達座より	昭和16年入学1年甲組島村潤一の卒業論文
1340	ベストン氏の美酒	昭和16年入学1年甲組川原 昇の卒業論文
1341	老木哀歌 (『鵬翼』第29号に論文掲載)	昭和16年入学1年甲組平野豊一の卒業論文
1342	現代のアメリカ	昭和16年入学1年甲組斎藤満壽男の卒業論文
1343	世界は何処へ (『鵬翼』第29号に論文掲載)	昭和16年入学1年乙組矢野義憲の卒業論文
1344	ぐれんういず・ぐれいんじゅノ姫君	昭和16年1年乙組大村 裕の卒業論文
1345	カインプラツの大実験	昭和16年入学1年乙組鈴木一男の卒業論文
1346	ホノルル	昭和16年入学1年乙組平田覚治の卒業論文
1347	統制経済	昭和16年入学甲組大室一郎の卒業論文
1348	世界経済計画に於ける若干の社会様相	昭和16年入学乙組小仲原三の卒業論文
1349	大東亜国防経済的立地	昭和16年入学乙組田付欣三の卒業論文
1350	将来に於ける南方企業方策	昭和16年入学1年乙組頼青木の卒業論文
1351	農村と協同組合	昭和16年入学乙組加藤春宣の卒業論文
1352	ファッシズムの経済的基礎	昭和16年入学乙組大久保誠一の卒業論文
1353	農業団体統合問題	昭和16年入学甲組柳原正昭の卒業論文 ＜卒業論文リストの柳信は誤り＞
1354	貨幣の国家的性格	昭和16年入学甲組神田忠雄の卒業論文
1355	決戦下の経済・生産力拡充と物価政策の問題	昭和16年入学甲組浦田雅夫の卒業論文
1356	経済に対する側面観	昭和16年入学甲組浦山稔の卒業論文
1357	輸送力と生産力（特に大東亜共栄圏における）	昭和16年入学甲組土橋芳敏の卒業論文
1358	戦争経済における経済循環	昭和16年入学乙組堀田耕一の卒業論文
1359	全球経済の海運	昭和16年入学乙組前田武男の卒業論文
1360	満州国における苦力労働力と労務新体制	昭和16年入学甲組池田好三の卒業論文

1361	戦争経済力と国民所得	昭和 16 年入学乙組陳石□の卒業論文
1362	経済統計より見たる景気変動（我が国における）	昭和 16 年入学乙組石川博の卒業論文
1363	経済学における理論と政策と歴史	昭和 16 年支那科入学林惟明の卒業論文
1364	経済学に対する私顔面観	昭和 16 年支那科入学森正雄の卒業論文
1365	東亜共栄圏の海上輸送とその対策	昭和 16 年支那科入学井上保郎の卒業論文
1366	戦時経済の中心問題について	昭和 16 年入学乙組渡海康次の卒業論文
1367	台湾における石炭産業につきて	昭和 16 年入学甲組明比徹郎の卒業論文
1368	転換期における台湾茶の生産および配給組織（『鵬翼』第29号に論文掲載）	昭和 16 年入学甲組武知透の卒業論文
1369	食糧配給機構	昭和 16 年入学甲組松尾幸一の卒業論文
1370	中小企業の再編成	昭和 16 年入学甲組曾根久仁夫の卒業論文
1371	生鮮食料品配給組織論—特に本島を中心として—	昭和 16 年入学乙組副島喜久夫の卒業論文
1372	現下の配給問題—特に配給統制について—	昭和 16 年入学乙組大石剛の卒業論文
1373	台湾の茶業—大東亜戦下の大転換期における—	昭和 16 年入学乙組鬼丸高信の卒業論文
1374	台湾島内における醤油配給の様相とその戦時性	昭和 16 年入学乙組藤田偵信の卒業論文
1375	株式取引所改組の一考察—過当投機抑制策を中心問題として	昭和 16 年入学乙組宮島壽男の卒業論文
1376	消費規正と切符制度	昭和 16 年入学乙組児玉勇二郎の卒業論文
1377	中小事業者の転？失業問題	昭和 16 年入学乙組泉正則の卒業論文
1378	戦時下の配給問題	昭和 16 年入学乙組中野正義の卒業論文
1379	華僑論	昭和 16 年入学乙組田上一郎の卒業論文
1380	配給機構統制論	昭和 16 年入学乙組橋口一彦の卒業論文
1381	マライシヤの宗教と原住民の宗教観念	昭和 16 年入学乙組宮里武雄の卒業論文
1382	土著（着？）民要素より観たる東印度経済の構造	昭和 16 年入学甲組吉田達男の卒業論文

1383	南方水産資源建設上の諸課題	昭和16年入学甲組吉武英一祐の卒業論文
1384	布哇	昭和16年入学甲組網谷正志の卒業論文
1385	大東亜建設と南方華僑	昭和16年甲組李清楠の卒業論文
1386	大東亜共栄圏の棉花対策	昭和16年甲組前田茂夫の卒業論文
1387	主として流通過程より見たる台湾米の経済構造について	昭和16年入学乙組吉武真也の卒業論文
1388	南洋華僑（主として広東省出身華僑について）	昭和16年入学乙組松尾忠の卒業論文
1389	大東亜政策（特に大東亜戦争かにおける華僑政策について）	昭和16年入学甲組中村進の卒業論文
1390	大東亜共栄圏の性格	昭和16年入学甲組井上芳徳の卒業論文
1391	東亜広域経済と南方華僑	昭和16年支那科入学小林弘の卒業論文
1392	積立資本ヲ論ズー利益分配トノ関係ニ於テ—	昭和16年入学乙組湖幡謙二の卒業論文
1393	原価構成要素として、材料費について	昭和16年入学乙組本田豊の卒業論文
1394	経済政策史	昭和16年入学甲組原田良司の卒業論文
1395	仏領印度支那農業資源ノ将来性ト大東亜共栄圏ニ於ケル地位	昭和16年入学甲組田中巍の卒業論文
1396	東亜貿易政策論	昭和16年入学甲組櫛田由美彦の卒業論文
1397	泰国に於ける華僑について	昭和16年入学甲組堀川一二三の卒業論文
1398	地政学研究	昭和16年入学甲組西田正則の卒業論文
1399	産業革命史論（産業革命の歴史的考察）	昭和16年入学甲組坪井保國の卒業論文
1400	経済社会に於ける人間性	昭和16年入学乙組三小田忠夫の卒業論文
1401	英國経済史上より見たる重商主義	昭和16年入学乙組西島啓太郎の卒業論文
1402	台湾ニ於ケル植民政策的考察	昭和16年入学乙組吉田哲雄の卒業論文
1403	大東亜共栄圏ニ於ケル植民政策的考察	昭和16年入学乙組若松大三の卒業論文
1404	在台華僑の一考察（主として人口構成より）	昭和16年入学支那科阿多浩治の卒業論文

1405	泰国の農業と華僑（特に米に於ケル農村経済に就て）	昭和 16 年入学支那科福田慎の卒業論文
1406	清朝釐？金税法規定の研究	昭和 16 年支那科加野文弘の卒業論文
1407	帝国憲法の神髓	昭和 16 年入学支那科花野直己の卒業論文
1408	三民主義の思想精神考察	昭和 16 年入学支那科木佐貫廣次の卒業論文
1409	随筆家としてのロバート・リンド	昭和 14 年卒業莊（村）（錦）榮一の卒業論文
1410	マンスフィールドとアカツブオブティーについて	昭和 16 年入学甲組鈴木寛の卒業論文
1411	法律と道德	昭和 16 年入学甲組玉真文雄の卒業論文
1412	英雄崇拜論“トーマス・カーライル”	昭和 16 年入学乙組守口幟の卒業論文
1413	契約自由ノ原則ノ制限	昭和 16 年入学乙組大塚栄四郎の卒業論文
1414	欠	
1415	現代所有権の特質	昭和 16 年入学乙組成利英の卒業論文
1416	日本企業方に就いて	昭和 16 年入学甲組古関一博の卒業論文
1417	租税公課の一般原理	昭和 16 年甲組古川芳郎の卒業論文
1418	大東亜共栄圏各地域に対する植民地政策論	昭和 16 年入学甲組横山竹二郎の卒業論文
1419	アダム・スミス、ヒューム	昭和 16 年入学甲組松浦徹の卒業論文
1420	重商主義に関する若干の考察	昭和 16 年乙組大内浩の卒業論文
1421	社会政策と企業整備 （『鵬翼』第29号に論文掲載）	昭和 16 年入学乙組宮澤一郎の卒業論文
1422	戦時下食糧増産と農村人口問題に就いて	昭和 16 年入学支那科加藤敬の卒業論文
1423	満州経済の新段階と日本の地位	昭和 16 年入学支那科武井義孝の卒業論文
1424	基隆港発展史	昭和 16 年入学支那小林常信の卒業論文
1425	支那の羊毛工業に就て	昭和 16 年入学支那科加藤定一郎の卒業論文
1426	リスト思想ノ回顧的展望	昭和 16 年入学甲組中辻健の卒業論文

1427	徳川封建社会ノ特質ヲ概論す	昭和16年入学甲組瀧口秀夫の卒業論文
1428	中国之匯兌	昭和16年入学支那科平根邦壽の卒業論文
1429	中国農村問題之研究	昭和16年入学支那科吉永重博の卒業論文
1430	南洋華僑史	昭和16年入学支那科水崎猛の卒業論文
1431	本邦国有鉄道特別会計一考察	昭和16年入学乙組西敏幸の卒業論文
1432	工作機械の原価計算について	昭和16年入学支那科今池幸男の卒業論文
1433	諺の研究	昭和16年入学支那科林戀煌の卒業論文
1434	中国経済問題中ノ金融貨幣	昭和16年入学支那科持永信男の卒業論文
1435	広州労働家庭之研究	昭和16年入学支那科黄登選の卒業論文
1436	南洋華僑與閩ノ社會	昭和16年入学支那科丸井彬の卒業論文
1437	欠	
1438	華僑対祖国の貢献	昭和16年入学支那科北川輝人の卒業論文
1439	中国の家庭問題	昭和16年入学支那科小山 方の卒業論文
1440	中国家庭改造問題	昭和16年入学支那科楊阿□の卒業論文
1441	支那抗日書瞥見	昭和16年入学支那科眞倉民彦の卒業論文
1442	農村経済及び合作	昭和16年入学支那科古川一の卒業論文
1443	支那文学史に対する一考察—唐宋文学を課題として—	昭和16年入学支那科安松兼光の卒業論文
1444	清末之幣制改革問題及倭義改革之理論	昭和16年入学支那科廣畑忠雄の卒業論文
1445	中国普及教育問題	昭和16年入学支那科陳化育の卒業論文
1446	日本歴史 第1巻（肇国）	昭和16年入学甲組矢住高の卒業論文
1447	顧る号泣の歴史（第1集）（日本武尊とその時代）（『鵬翼』第29号に論文掲載）	昭和16年入学支乙組中山輝夫の卒業論文
1448	鴉片戦争発後の支那社会	昭和16年入学支那科小林林平の卒業論文

1449	風習上より見たる支那民族	昭和 16 年入学支那科島本英一の卒業論文
1450	近世支那の秘密結社	昭和 16 年入学支那科清野隆の卒業論文
1451	支那の社会階級に就いて	昭和 16 年入学支那科三反園早苗の卒業論文
1452	大東亜戦下に於ける南洋華僑の地位	昭和 16 年入学支那科柴田昌一の卒業論文
1453	疎開をめぐる列強の支那侵略	昭和 16 年入学支那科肘黒初夫の卒業論文
1454	支那農村社会経済史	昭和 16 年入学支那科目代勝己の卒業論文
1455	大東亜共栄圏に於ける南洋華僑の地位	昭和 16 年入学支那科西村敏夫の卒業論文
1456	上海共同租借史	昭和 16 年入学支那科池田憲司の卒業論文
1457	南支及び台湾に於ける戒克船に就いて	昭和 16 年入学支那科北川鶴之祐の卒業論文
1458	人口と国際貿易	昭和 15 年入学乙組吉村達弘の卒業論文

参考文献

周婉窈 [2013], 増補版・図説『台湾の歴史』, 平凡社。

渡辺邦博 [2015]「台北高等商業学校卒業名簿作成に関する諸問題」奈良学園大学『社会科学雑誌』12。

『台湾総督府高等学校一覧』大正 12 年。

『台湾総督府高等商業学校一覧』大正 13 年。

『台湾総督府高等商業学校一覧』大正 14 年・大正 15 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 4 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 5 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 6 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 7 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 8 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 9 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 10 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和 11 年。

『台北高等商業学校一覧』昭和12年。

『台北高等商業学校一覧』昭和13年。

『台北高等商業学校一覧』昭和14年。

『台北高等商業学校一覧』昭和15年。

『台北高等商業学校一覧』昭和16年。

(わたなべ・くにひろ／本学兼任講師／2017年9月6日受理)

Missing Links, Some Possibilities on the Graduation List from Taihoku Commercial College

WATANABE Kunihiro

The graduation register of Taihoku Commercial College, can be trusted until graduation September, 1943. But the school stopped to publish the file of graduation from 1942. So we cannot confirm the graduation register in 1944, especially in 1945. On the contrary, about the graduation thesis catalog, including 1458 articles, we can identify the authors nearly 100%. These thesis can be used to show the students final years of their working days until the year 1943.